ＩＳ―インフィニット・ストラトス― 季節の廻る場所

椿牡丹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ―インフィニット・ストラトス―　季節の廻る場所

【Ｎコード】
Ｎ７２３７Ｙ

【作者名】
椿牡丹

【あらすじ】
ＩＳ。
正式名称、インフィニット・ストラトス。
女性にしか扱うことのできない兵器だ。この兵器の登場により、世界はその姿をがらりと変えていた。
そんな時、一人の男子学生がＩＳを起動させる。
『世界で唯一ＩＳを使える男』には彼を取り巻く問題、そして次々と襲いかかる様々な困難が待っていた。

だがこの時、実はもう一人同じ受験会場に足を踏み入れている少女の姿があった。

これは本来ならば当たり前のように生き、当たり前のように死ぬはずだった少女が、その道行きを歪められていく物語。

プロローグ

インフィニット・ストラトス。
元々は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ。しかしながら宇宙開発は一向に進まず、結果スペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、今となっては各国の思惑により『スポーツ』へと姿を変えて落ち着いている。
そんな『インフィニット・ストラトス』、通称『ＩＳ』には様々なものがある、がたった一つ共通する事柄があった。
それは『女にしか使えない』という致命的な欠陥だ。

「ここどこだ？」

市立施設の多目的ホール。その中を一人の少年が歩いている。
季節は冬。二月の真ん中であり、学生にとっては受験シーズンの真っ只中である。そんな時期に少年が何をしているのかといえば、もちろん受験をするための会場へと向かっているのだ。
ただし彼の足取りは不確かなもので、あっちに行っては戻り、こっちに行っては戻り、とただ歩いているだけのようにも見えないことはない。が、あたらずと雖も遠からず。
（これって迷ったんじゃ……いや、中学三年にもなって迷子は恥ずかしすぎる）
初めて来た受験会場で完全に迷子になっていた。

「とりあえず次に見つけたドアを開けるぞ。うん、それで何とかなるはずだ」

半ばやけくそとも捉えられるようなこの行為。
この行為が後の彼の人生を大きく変えてしまうことに、まだ彼は気付いていなかった。

そして『世界で唯一ＩＳを使える男』の誕生とほぼ同時刻。

「うわぁーん！！　ここどこなのー！？」

一人の女子生徒が道に迷っていた。

茶色を帯びたセミロングの黒髪に赤いカチューシャ。右側だけを三つ編みにするという個性的な髪型の少女だ。案内図と格闘しているものの、思ったような成果は挙げられていない。

先程の少年の迷い方が可愛く見えてしまう。なにせ彼女、既にこの多目的ホールについて一時間が経とうとしているのだ。
両親から「遅れるといけないからもう行きなさい」と言われた事もあり早めに家を出て、こうして指定された受験会場までやって来たのだが……。

両親のその心配は現実のものとなる。

いくら多目的ホールといえど一時間も彷徨えば中を一通り見て回る

事が可能だろう。しかしこの彼女、まるっきり周りのことを見ていなかった。

（早く行かなきゃ受験に遅れちゃう！！）

その事ばかりが専行してしまい肝心の『探す』という行為が疎かになっているのだ。

これでは見つかるものも見つからない。

「そこの学生、何をやっている！！」

「――っ！！」

不意に後ろからかかる声。

悪いことなど何もしていない。ただ道に迷っているだけなのだが、

その威厳のある声に思わず謝ってしまいそうになる。

振り返ると少女よりの頭一つ分大きな身長の女性がこちらに向かって歩いてくる。

――黒い！！

女生徒は喉まで出かかった言葉を何とか飲み込む。

初対面な上に相手は大人だ。それに思ったことをそのまま口にしても許してくれるような優しさは外見からは感じられない。

整った容姿、後ろで束ねられた艶のある黒い髪、すらりと長い身長。

スーツ・ネクタイ・ヒールと全てが黒で統一されているからだろうか、さらにシャープに感じられる。

「あの私、道に迷ってしまいまして」

「……ちなみに聞くが、左手で持っているそれは何だ？」
「えっ！？　コンパスですけど」
「右手で持っているものは何だ？」
「ここの案内図です。でもどうしてもここに辿り着けなくて……」
沈黙が流れる。
葉書に描かれている図の一ヶ所を指し示しながら固まる少女。
そんな彼女を見て歎息する女性。
見つからないのも当然だ。
一時間近く彷徨った結果、彼女は目的地の真逆に位置へと移動していたのだ。

「すぐそこを右に曲がってしばらく廊下を進むと扉がある。そこが試験会場だ」
「そうなんですか！！　ありがとうございます！！」
「ここは四時までしか借りていないからな。少し急いだ方がいい」
「はい！！」
案内図を見ることなく告げる女性の言葉に少女は大きく頷いた。
再度案内図を確認し、コンパスを確認すると少女は勢いよく走り出し。
左に曲がった。

「おい！！　ちょっと待て。お前は私の言うことを聞いていたのか？」
「えっ！？」
「もういい、面倒だ。ついて来い」
女性の言っている事が分からないのか、少女は首を傾げるも大人しく後ろについて行く。
ついて行くだけにもかかわらず未だコンパスと格闘しているところを見ると、自力で行きたいのかもしれない。そんな事を考えながら女性は問う。
「名前は？」
「えっ！？　あぁ、名前ですね。秋穂です」
えっと、と言いよどむ少女――秋穂の考えが分かるのか、自分から振った話であるために予想がついていたのか、女性は足を止めることなく言い放つ。
「私は織斑千冬だ」
自己紹介でも歩みは止めない。
が、続けるように言った秋穂の言葉に千冬は足を止めてしまう。
「千冬さんですか。綺麗な名前ですね」
「……」
「あ、あの私なにか悪いことを――」
「いや、何でもない。――ほら、着いたぞ」

「ほんとだ！！　ありがとうございました！！」

頭を下げる秋穂の表情は、あどけない少女そのもの。満面の笑みを浮かべながら扉を開け足を踏み入れる。

そんな秋穂の行った先――扉を見つめ続けているのは先程まで一緒にいた千冬だ。その凛々しい表情は変わらない、が彼女を良く知るものがここにいたならば、口元が微かに上がっていることに気付けただろう。

「単に知らないだけか、あるいは――」

最後まで言い切ることなく、足音を残して姿を消した。

第零話：それぞれの始まり

「無理矢理だったな……」

世界で唯一ＩＳを使える男――織斑一夏はベッドの上で天井を眺めていた。

あの日――一夏がＩＳを起動させ、世界で唯一ＩＳを使える男が誕生した日から一夏は日本政府に保護されている。

が、実際は保護という名の下で監視されている状態である。
ＩＳ学園に入学となれば、全寮制である上に滅多に外には出ることが出来なくなってしまう。今この時間は、一夏にとっても重要なものだった。

にもかかわらず、一夏がベッドから起きて何をするかと言えば。

家の掃除だった。

「明日ゴミの日だしな」

慣れた手つきでてきぱきと部屋の中を片付けていく一夏。
その様子は仕方がなくというものではなく、むしろ掃除を楽しんでいる風にも見える。

「ふぅ……。とりあえずこんなもんか」

昼頃から始めたにもかかわらず、外を見ると既に真っ暗となっている。

これから春へと季節が変わるとはいえ、今はまだ冬と変わらない。
窓から入ってくる風は、昼ならば日差しも出ていたために心地よかったが、掃除が終わり一息つくと涼しさを越えた寒さがやってくる。

「うぅ……まだ寒いな」

窓を閉め、風に当てられた体を震わせる一夏は、まとめたゴミ袋をきつく縛り、ゴミ捨て場まで持っていく。
この時捨てたゴミの中に、古い電話帳だと思っていた物が入っていることに気が付いたのはそれから一週間後のことだった。

◇　◇　◇　◇　◇

「へぇー。ＩＳにも色々あるんだー」

とある一室。
ぬいぐるみからキーホルダー、人形にいたるまで様々な種類の『可愛いもの』で埋め尽くされた部屋の中、一人の少女がベッドで寝転がりながら分厚い参考書に目を通していた。
ＩＳ学園――ＩＳ操縦者を育成するための学校――への入学が決まった新入生に送られるＩＳに関する基礎知識等が書かれた参考書だ。
その参考書、大きさ・分厚さもさることながら書かれている文字が小さい。
見る者が見れば、なにか別のものと見間違えてしまうかもしれない

代物だ。

「あれ？」

そんな参考書をゆっくりと、だが確実に読み進めていく少女だが、ふとあるページでその手が止まってしまう。

そのページの内容は『モンド・グロッソ』。三年に一度行なわれるＩＳの世界大会だ。今現在『スポーツ』として落ち着いているＩＳだが、それは建前でしかない。

ミサイルなどただの兵器では相手にならない。故に、ＩＳにはＩＳでしか対抗できない。それはつまり『ＩＳの性能の高さ＝軍事力』となるのだ。

だが、少女が手を止めた理由はそこではない。もっと単純で、そこに写った一枚の顔写真に見覚えがあったからだ。

「やっぱり千冬さん、ＩＳ学園の関……け、い……」

最後まで言葉にならない。どころか明らかに少女の顔が青ざめていく。

顔の筋肉はひくつき、参考書を持つ手は震えている。

『モンデ・グロッソ第一回大会優勝者　織斑千冬』

それは千冬が世界最強であることを示すものだった。

「嘘……千冬さん、優勝者なの？　ってことは世界一！？」

◇　◇　◇　◇　◇

ＩＳ学園、職員室。

ＩＳ操縦者を育成するための学校であるがゆえに、その教員ともなると仕事の量は膨大なものになる。

「今年の生徒はすごいですね」

「そうだな」

「イギリスの代表候補生に篠ノ之博士の妹さん、それになんと言っても織斑先生の弟さんがいますからね」

話しているのは千冬ともう一人、眼鏡をかけた女性教員だ。

一枚一枚の資料を丁寧に、手早く読み取り片付けていく。女性教員の仕事は決して遅いわけではない。が、隣で座っている千冬の仕事振りを見れば誰もが息を飲んでしまうだろう。

「あいつのことは置いておくとして……もう一人、面白そうな奴がいる」

ふと手を止めた千冬の目に止まる一枚の資料。

その表情から、資料を受け取った女性教員もどれだけ千冬がその生徒を目に留めているかを知る。

「へぇ、ＩＳ適性は……Ａですか。将来有望ですね」

「ランクなど今の段階ではほとんど意味がない。そういう意味では周りとは大差ないな」

「えっ！？　ま、待ってください。えっと……名前は……」

立ち上がり、部屋を出て行く千冬。それに続くようにして女性教員も慌てて職員室を後にする。

資料には、右側だけを三つ編みにするという個性的な髪型をした女子生徒の顔写真が貼られていた。
茶色を帯びた黒髪に黄色いカチューシャを着けている。

そこに記されていた名前を女性教員は忘れまいと強く印象づける。
千冬が目をつけるような生徒だ。おそらく何か特別なものを持っているのだろう。

「えっと……春日秋穂（かすがあきほ）さん、ですね」

第零話：それぞれの始まり（後書き）

本格的に始まりましたＩＳでございます。
あまり後書きというものは得意ではありません。が、そうも言っていられません。

主人公の軽い紹介でもしておきたいと思います。

まず名前ですが……。
ぶっちゃけて言いますと適当です。

一夏。千冬。→夏と冬。→春と秋がないじゃん！！→どっちかつけたいなー。→もう両方つけちゃえ！！
とこのような流れでつきました。
ちなみに春と秋を逆転させた『秋原春花』とか春花を春香にするかとか色々考えたんですが……。

春日が異様に私の中ではまりました。
もうこれしかない！！と思いました。

ちなみに『秋穂』以外に名前も思い付きませんでした。
こっちは語彙力の問題です。

まぁこんな感じで出来上がりました小説でございます。
余計なことはバンバンしていきたいです！！
これからよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7237y/

ＩＳ―インフィニット・ストラトス― 季節の廻る場所

2011年11月22日05時14分発行